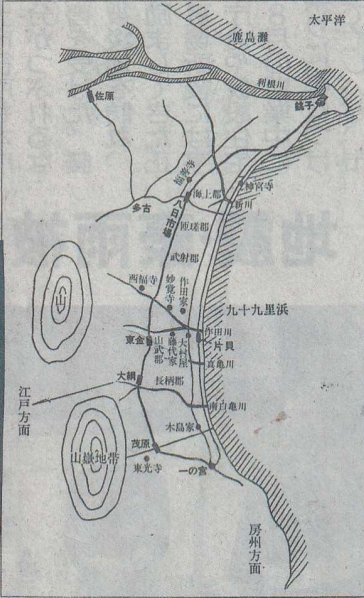
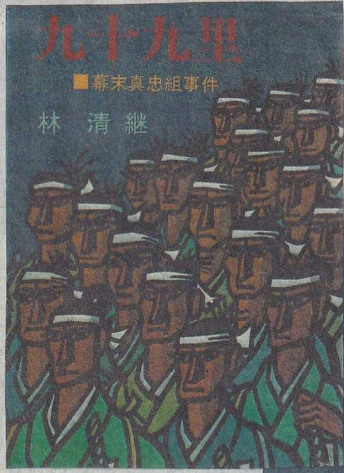


貧困や格差への憤りが爆発したのが真忠組事件だった。
—カバーイラスト、地図は『九十九里』(林清継著)より



『九十九里』にみる漁村のくらし

絵と文・熱田親意 題字・熱田泰華

紀伊・房総

くらしお物語

◇6◇

今年に入ってから、見えない。疫病は繰り返しもよらぬ新型コロナウイルス、人類社会を襲った。『病が語る日は、日本国内はもちろ本史』(酒井シツ著、十九里 幕末真忠組事件) (林清継著、論書) (林清継著、論書) 起し、いまだ終息は

862)年には、麻疹の大流行で24万もの人が亡くなったという。そんな不安定な情勢の中、世の矛盾をただそうと、九十九里で農民隊が決起した。

以下の内容は、『九十九里 幕末真忠組事件』(林清継著、論書)による。

九十九里のイワシ漁は、作田川に船を停泊させ、周辺の松林に番納屋を張り、大群を待つところから始まる。大群を見つけたら、沖合という指揮者の元に出漁体制に入る。真網船、逆網船が左右に分かれて包囲する。水揚げは一回17貫(約64キ)ほどで50〜60両現在の価値で200万円ほどの売り上げになる。イワシ以外の水揚

世直し一揆「真忠隊」

げは、番納屋の若衆の酒の肴になった。片貝(現九十九里町)周辺には魚屋や旅館、飲み屋などで大繁盛した。こんな元気な片貝に目を付けていたのが幕府のお役人だった。毎年1、2月ごろに「現地視察」と言っておき、酒色の接待を旅館主人に求めたというから、時代劇そのものだ。網元が利益分配として支払う給料は6月、

12月の年2回。網元が総売り上げの半分をとるに持たない真忠組は、幕府が差し向けた諸藩の軍勢に敗れ、主立った者は処刑された。イワシ漁の発展で、漁村の周辺の農家は出稼ぎ先が出来たと、喜んで網元の傘下に集まったが、船方にはなれず、搾り粕、煮干し、干鰯づくりに明け暮れて、給金ごまかしの犠牲になったりした。出稼ぎも役に立たず、農家は痩せるばかりで、肥えるのは税を取り立てる武士ばかりという社会構造が読み取れる。本社社員と派遣社員の格差、権力にも目を言わせる官僚たちを現代社会に、九十九里の農村と同質の矛盾を感じる。政府や経営者は、コロナ予防や水害の被害者に心を尽くすと共に、将来を見据えて「世直し」を心がけてほしいと思う。